



Title	大阪市におけるHIV検査・相談体制の展望：安心して検査できる場づくりから、正しい知識を広げて、共生社会へとつなぐ
Author(s)	有馬, 和代
Citation	大阪公衆衛生. 2009, 80, p. 15-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83419
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

常時エイズグッズなどを作る機会を提供することによりエイズに触れ、学ぶ機会を増やし、興味を持ってもらう「校内ピア活動の定着化」です。一方、保健所の役割は高校・大学へのアプローチやボランティアサークルなどを通じた10代後半から20代前半の「核となるピアの開拓」です。現在、各役割を果たすことを目標として活動を実践しようとしています。

【まとめ】

エイズ予防啓発事業において、関係機関との

連携、地域での活動、更なるネットワーク作りが必要になることは言うまでもありませんが、エイズについて触れる機会を頻回に持つことにより、若者のエイズの知識の向上が重要になっています。地道に、着実に活動を行うことにより現在の若者から、次世代の若者へとエイズの知識が引き継がれていくことを期待し、来年度も引き続きピア育成事業を行っていく予定です。

トピックス HIV/AIDS

大阪市におけるHIV検査・相談体制の展望

～安心して検査できる場づくりから、
正しい知識を広げて、共生社会へとつなぐ～

大阪市保健所 感染症対策担当
保健副主幹 有馬 和代

1 はじめに

大阪市においては、平成9年からHIV感染者、エイズ発病者の新規報告数が増加し始め、平成16年からは100名を超えるようになったことから、エイズ対策を更に積極的に進めなければならない状況となっている。

そこで、平成19年6月に「大阪市エイズ対策基本指針」を策定し、「5年間で新規エイズ患者報告数を25%減少させる」という大目標を実現するために、具体的戦略を5つ打ち出した。5つの戦略の中には、「HIV抗体検査体制・相談体制の拡充」という項目が盛り込まれ、4ヵ所の保健福祉センターで実施している検査・相談事業以外に、新たに、平成20年8月から毎週金曜日、大阪検査相談・啓発・支援センター（chot CAST なんば）において夜間HIV検査・相談事業を開設した。

2 新たなHIV検査体制のめざすべき方向

この事業においては、“受検者が安心して検査・相談できる場”をめざして体制を整えている。

特に検査前のカウンセリング（以下「検査前ガイダンス」という）においては、HIV/エイズの基本的な知識、検査法によるウィンドウピリオドなどについての情報を提供し、受検者自らが、HIV検査の意義を確認し、検査実施の判断ができる、すなわち、インフォームドチョイスできる体制を心がけている。

そして、この体制の中で正しい知識を習得した検査経験者が核となり、HIV/エイズに対する偏見・差別が存在する社会に、HIV/エイズに対する正しい情報を広げ、ひいては感染者が受け入れられ、HIV/エイズとの共生が図れる社会となっていくことを願っている。

そこで今回、新たな検査体制の効果を3つの視点（評価指標）で分析することにより、めざすべき方向に合致しているかについて検証したので報告する。

3 対象と評価方法

平成20年8月1日から10月24日までの毎週金曜日、午後5時30分～7時30分に大阪検

査相談・啓発支援センターに来所した 356 名に対して、ガイダンスを受ける前と1週間後の検査結果面談前にアンケート調査を実施した。

評価方法は次の 3 つの視点で行った。

① HIV/ エイズの“知識の度合い”(教育効果)
「HIV の検査について」「エイズについて」「HIV の感染方法について」の3項目で 10 の質問に対して、「正しい」「正しくない」「わからない」で答え、10 点満点中の正答点数によって、受検者の HIV/ エイズに対する知識の度合いを測定した。また、同じ内容のアンケートを1週間後の検査結果面談前にも実施し、その正答点数を比較分析して教育的効果を評価した。

② HIV/ エイズの“意識の度合い”(意識の変化)

検査を受けることで HIV/ エイズを考える機会となった度合いを検査結果時のアンケート項目から評価した。

③検査前ガイダンスを受けた“満足度”

検査前ガイダンスを受けた満足度を「内容のわかりやすさ」「スタッフの接し方・話し方」「相談しやすい雰囲気」「プライバシーの保持」「待ち時間」の 5 項目について検査結果時アンケート項目から評価した。

4 結果

ガイダンス前アンケートは全員が実施(回収率 100%)しており、356 名を評価対象とし、①の評価対象は、1週間後の結果説明に来所した全員(回収率 100%)の 323 名を対象として比較検定を行った。

属性

年齢構成は、20 歳代 171 人 (48.0%) 30 歳代 99 人 (27.8 %) 40 歳代 31 人 (8.7 %) 19 歳以下 18 人 (5.1%) 50 歳代 8 人 (2.2%) 60 歳以上 7 人 (1.9%) 不明 22 人 (6.2%) の順で 20 歳代が一番多かった。

性別では、男性 155 人 (43.5%) 女性 179 人 (50.3%) 不明 22 人 (6.2%) と女性の方が多かった。

受検者の住居地では、大阪市内 165 人 (46.3%) それ以外の大阪府内 129 人 (36.3%) 大阪府外 39 人 (11.0%) 不明 23 人 (6.5%) と大阪市内が半数を占めていた。

①の知識の度合いの評価結果は、表1のとおりで、ガイダンス前のアンケートでの平均点は 7.70 点 1週間後の検査結果面談時アンケートでは、9.52 点で正答率は向上して、 $t = -17.68$ で $P < 0.001$ と有意な差があった。

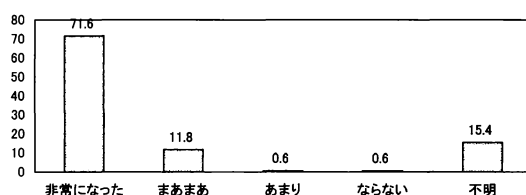
表 1

	人数	最小値	最大値	平均値
検査前点	334	2	10.0	7.70
検査後点	323	6	10.0	9.52

t 値=-17.68 $P<0.001$

②の意識の度合いについては、図1のとおりで、「今回の検査が、エイズを考える機会となった」との回答は、71.6% (255 人) であり、7割以上の受検者がエイズを考える機会となっており、「機会となった」と答えた人の検査後のアンケートの平均点は 9.56 点、「機会となった」以外の平均点は 9.39 点で有意な差はなかったが、0.17 点と微量差が見られた。

図1 HIV/エイズの意識の度合い
「質問内容: 今回の検査は、エイズを考える機会になりましたか。(N=356)」



③の満足度については、図2、図3のとおりで、「ガイダンスがわかりやすい」の回答は、81.5% (290 人) であり、検査前ガイダンスの内容の判りやすさについての満足度は高かった。また、「スタッフの接し方・話し方」については、69.1%の人が満足と答え、「相談しやすい雰囲気」では、64.3%、「プライバシーの保持」では、53.7%、「待ち時間」では、28.4%と、「待ち時間」での満足度が一番低かった。

また、アンケートの自由記載欄には、「エイズに関する正しい知識を得ることができたので、もっと検査を友人・知人にも勧めたいと思う。」など満足度が高いと思われる記載内容が、51 件数中 23 件 (45.1%) あった。

5 考察

アンケート結果から HIV/ エイズに対する知識の度合いでは、1週間後の検査結果面談時の平均点がガイダンス前の平均点より有意に高く、検査前ガイダンスは正しい知識の教育的効果

があったと立証できた。これは、検査前の「ガイダンスのわかりやすさ」の満足度の高さが知識向上に繋がったと考えられる。また、HIV/エイズに対する意識度では、検査を実施することにより意識が高まり、HIV/エイズに対する正しい知識の取得意識の向上にも繋がっていると思われる。

検査前ガイダンスを受けた満足度においては、「スタッフの接し方・話し方」「相談しやすい雰囲気」という検査体制のソフト面での満足度が高く、会場の構造上の問題から改善困難な「プライバシーの保持」や来所人数が多くなると難しくなる「待ち時間」問題などハード的体制などに関係する項目の満足度がソフト面の満足度より低い結果となった。今後はこれらの課題を解決していく方法を考える必要がある。

このようなことから、検査前ガイダンスは、ハード的体制での満足度の低さはあるが、相対的に満足度が高く、正しい知識の教育的効果が高いガイダンスであり、検査を受けることで、HIV/エイズに対する意識が高まり、正しい知識の取得にもつながっていくことがわかった。また、受検者の中には、身近な人へ正しい知識の啓発を行おうと自発的に行動する人がいることもわかった。

図2 検査前ガイダンスを受けた満足度(内容のわかりやすさ)
「質問内容:1週間前に受けた“検査前ガイダンス”の説明を受けてどうでしたか。」(N=356)

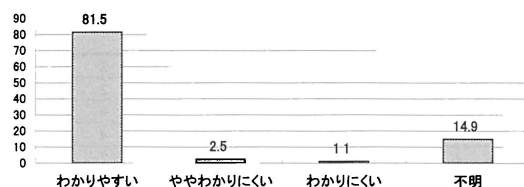
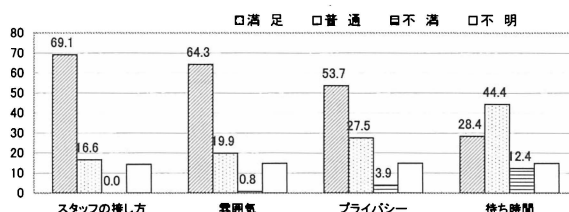


図3 検査前ガイダンスを受けた満足度
「質問内容:検査前ガイダンスをうけての満足度をお聞きます。」(N=356)



6 終わりに

HIV 検査・相談事業は、“受検者が安心して検査・相談できる場”をめざした体制づくりを心がけていくことで、受検者が増加し、正しい知識を広めることができると考える。そしてそのことが、HIV 感染者が受け入れられる共生社会をつくるためのアドボカシー活動であり、行政の大きな役割の一つであると考えている。

トピックス HIV/AIDS

堺市のHIV 検査事業の現状と課題

堺市保健所医療対策課主幹
野浦 智子

【エイズ予防指針の改正】

厚生労働省の HIV/エイズの発生動向によると平成 19 年に HIV 感染者・エイズ患者はともに前年に引き続き過去最高の発生件数があり、依然として増加傾向が続いています。

平成 18 年 4 月に改正された「エイズ予防指針」では、国と地方公共団体との役割分担を明確にし、基本的には地方公共団体が中心となって

エイズ対策を実施していくことが求められており、保健所における検査・相談体制の充実、医療体制の確保及び普及啓発の実施を図るなどの施策を重点的に取り組むこととされています。

【堺市の発生届出件数】

表 1. にあるように堺市の患者及び感染者の発生については毎年届出件数が数件あります。HIV 感染者とエイズ患者の件数を比べると、や